

日本語教室との協働

経営管理グループ マネージャー 横田 誓子

概要

2024年5月、当館を会場として「次世代のための日本語教室」(*)が開講された。毎週火曜日と木曜日に、外国人学校の生徒や公立小中学校に通う外国につながるを持つ児童・生徒、そして支援者である日本語教師や日本語ボランティアが科学館に通っている(2025年度も継続)。永住や定住している外国人が多い浜松市にありながら、外国人市民の科学館利用は決して多いとはいえない。また、これまで多文化共生に対する積極的な取り組みはほとんどなかった当館において、日本語教室という多文化共生社会づくりを推進する1つの「拠点」ができたことにより、当館の事業や職員の意識はどのように変わったのか。1年の取組みを振り返り、報告する。

※「次世代のための日本語教室」:「浜松市地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を公益財団法人浜松国際交流協会(HICE、以下浜松国際交流協会)が受託し、2024年度から開講された次世代の子どもや若者を対象にした事業。

1. はじめに

博物館は地方公共団体、学校、社会教育施設その他の関係機関及び民間団体と相互に連携を図りながら協力し、当該博物館が所在する地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光、その他の活動①の推進を図り、もつて地域の活力の向上②に寄与するよう努めるものとする。

(下線・番号:筆者)

これは、令和5(2023)年4月1日に施行された改正博物館法の第3条第3項に書かれた文言である。特に下線部①②については、令和4年4月15日に文化庁より通知された「博物館法の一部を改正する法律の公布について」の留意事項6,7に、次のように説明されている。

①「その他の活動」には、まちづくり、福祉分野における取組、地元の産業の振興、国際交流等の多様な活動を含み、②「地域の活力の向上」については、地域のまちづくりや産業の活性化に加え、コミュニティの衰退や孤立化等の社会包摂に係る課題、人口減少・過疎化・高齢化、環境問題等の地域が抱える様々な課題を解決することを含むこと。

これにより博物館施設が、地域のさまざまな課題に向き合うことが努力義務となった。

この第3条は「博物館の事業」について定められた部分であるが、改正前の文言の中に「地域」という言葉はない。とはいえ、約70年ぶりの改正に至るまで、地

域と博物館が無関係だったわけではない。地域と博物館とのかかわりは、1970年代から80年代にかけて伊藤寿朗が提唱した博物館第三世代論に詳しい。「博物館が、日常的利用が可能な場所に設置」され、「地域課題は、市民自身が主体となって取り組むことを基本」としながら、博物館はその機能を通して、「市民とともに応えていく」ことが地域博物館の役割であるとしている。(※1伊藤1987)

当館は、2024年10月に改正博物館法のもと、登録博物館として認定を受けた。今後、地域博物館として「地域」と向き合い、その機能をもってどのように役割を果たしていくのか。今年度取り組んだ、日本語教室(浜松国際交流協会)との協働を報告するとともに、地域博物館の役割について、改めて考える。

2. 背景

②浜松市について

国籍	人数
ブラジル	9,529
ベトナム	4,929
フィリピン	4,726
中国	2,305
インドネシア	1,952
ペルー	1,800
韓国	990
その他	4,230
合計	30,461

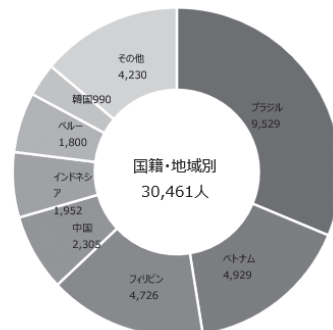


図1: 浜松国際交流協会資料より筆者作成

浜松市には2025年3月1日現在、85か国30,461人(浜松市総人口782,684人のうち3.9%)の外国人住民がいる(図1)。世界的な金融危機「リーマンショック」

が起こった2008（平成20）年の33,326人をピークに、一時は20,000人まで減少したが、2014年の「出入国管理及び難民認定法」（入管法）改正を経て増加に転じ（図2）、2024年の11月には、再び30,000人を超えた。

現在、浜松市に住む30,461人の外国人住民の国籍の内訳は図1の通りである。

浜松市の特徴としては、永住・定住者が約7割を占めることや（図3）、ブラジル人住民の数が全国で最も多いことである。

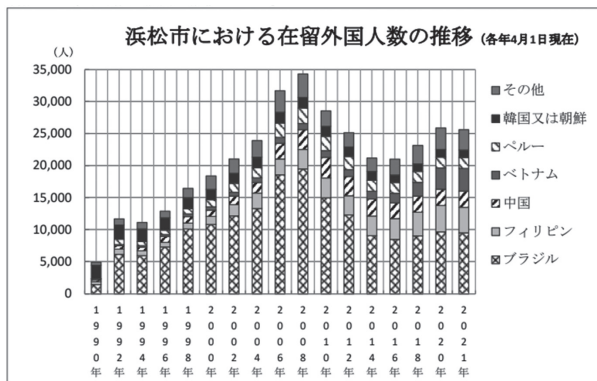


図2：浜松市における日本人市民及び外国人市民の意識実態調査報告書：令和4年1月

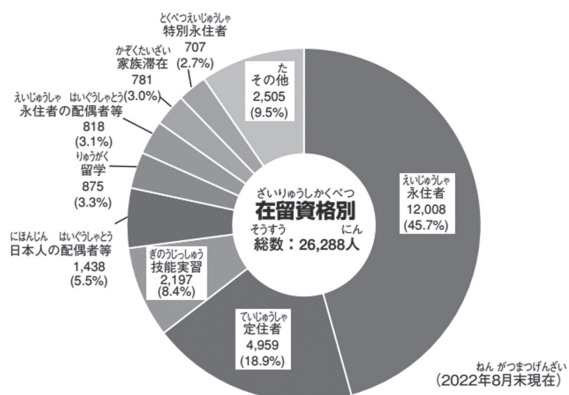


図3：在留資格別外国人市民数：浜松市資料

浜松市にブラジルにルーツをもつ人たちが集住する理由を考えると、私たちは1908年に始まった日本人のブラジルへの移住の歴史から紐解かなければいけないが、契機となったのは、1950年代半ばから1970年代前半までの日本の高度成長期、1980年代のバブル景気による労働者不足や、1990年の入管法改正で、外国人労働者やその家族の受入れ間口が広がったことである。さらに、同時期（1980年代後半から1990年代前半）におけるブラジルの深刻な経済危機など、日本とブラジル両国それぞれの要因が重なり合って、世界的に有

名な自動車、オートバイ、楽器メーカーの企業や工場が多い浜松市に、日系ブラジル人が「デカセギ」として浜松に住み始めたことによる。詳しくは、浜松国際交流協会の「浜松の外国人住民の受け入れの歴史」をご覧ください。（※2）

②浜松市の施策

浜松市は、国際化施策の指針として2001年度（平成13年度）「浜松市世界都市化ビジョン」（※3）を策定（2007年度改訂）し、「共生」「交流・協力」「発信」の各分野での施策を推進。特に「共生」分野については、公益財団法人浜松国際交流協会が運営する「浜松市多文化共生センター」（2008年に浜松市国際交流センターから名称変更）と「浜松市外国人学習支援センター（U-ToC）」（2010年開設）を両輪としながら、日本人市民と外国人市民の共生に向けた生活基盤支援や日本語学習支援等を進めてきた。その後、急速なグローバル化、世界的な金融危機（2008年）、東日本大震災の発災（2011年）など、市民を取り巻く環境が不安定さを増す中、浜松市は日本人・外国人を問わず、誰もが安心して暮らせる地域社会を築くため、2013年に浜松型の多文化共生社会の実現を目指して「浜松市多文化共生都市ビジョン」を策定し、外国人市民を「まちづくりを進める重要なパートナー」と捉え、施策を実施している（現在第3次ビジョン：2023年度～2027年度）。特に第3次ビジョンでは、第2次ビジョンの成果や課題をもとに、「浜松市在住の外国人市民の特徴を踏まえた日本語学習支援体制の強化・充実」が、今後重視する取り組みの方向性の1つに掲げられている。（※4）

3. 浜松科学館と「多文化共生」

当館は1986年に、浜松駅にほど近い街中にある科学館として設立され、市民に科学の学びを提供してきた。



図4：リニューアルオープンした浜松科学館

2019年に全面リニューアルオープンし、東京に本社を置く株式会社乃村工藝社と、地元企業である株式会社SBSプロモーションの共同事業体が指定管理者として運営を開始した。リニューアルオープン当時、浜松市が外国人市民が集住する都市として、「多文化共生都市」を掲げ、その施策を進めていることを知っている職員はほとんどいなかったらと思う。浜松市出身の職員も、市内に外国人住民が多くいることは知っているが、日常でかかわりを持って生活している人はほとんどいないのではないだろうか。リニューアルオープンからの数年間、浜松市の社会教育施設であり公共施設でもある当館で、外国人住民を念頭に置いた施設運営や事業を行ってきたとは言いがたい。そんな中、窓口業務やチケットの場で、さまざまな来館者と最初に出会うアテンダントチームの職員から、「やさしい日本語」の研修を受けたいという相談を受けた。「やさしい日本語」は、在住外国人への情報伝達の手段として、1995年の阪神・淡路大震災以降普及してきた、いわゆる社会運動である。高齢の方から幼児まで、さまざまな人が訪れる施設での情報の伝え方に、「やさしい日本語」が有効ではないかと考え、浜松国際交流協会に研修を依頼し、2023年12月にアテンダントチームを中心に実施、その後、2024年4月には、職員全員で研修を受けた。

「やさしい日本語」の研修については、当館紀要第1号において報告している（「やさしい日本語研修 地域の課題に向き合う、第一歩として」）が、私たちは研修を受けて初めて、浜松市に在住する多くの外国人市民の存在を認識し、なぜ「多文化共生」の推進が必要なのかを知る機会をもった。



図5：「やさしい日本語」研修

しかし、「やさしい日本語」とは何かを知り、市内に外国人市民が集住していることを知ったことによって、来館者に「やさしい日本語」を利用した案内はできても、施設そのものが、多文化共生を推進し、地域に貢献するために、どのような取り組みができるのか、言い換えれば、「何をしたらいいのか、分からなかった」というのが現状であった。

4. 日本語教室の開講と協働

当館を会場に次世代の子ども・若者を対象にした「日本語教室」の開講が決まったのは、「やさしい日本語」の研修から1年後のことである。浜松国際交流協会から、子どもたちの日本語の学びの場として、浜松科学館で日本語教室を実施したいとの希望をいただき、会場を提供する形で、2024年5月、「次世代のための日本語教室」が開講された。浜松市が開講している日本語教室は、浜松市外国人学習センター（U-ToC）を始め、市内協働センターなど市内に複数ある（※5）が、博物館施設で開講されたのは、当館が初めてではないだろうか。開講された「次世代のための日本語教室」では、①外国人学校の生徒対象の「課外放課後日本語教室」、②公立小中学校の児童・生徒対象の「放課後日本語補習教室」2つの教室が実施され、ブラジル、ペルー、ベトナム、中国、インド等につながりをもつ子どもたちが5月から3月まで（7月～9月は科学館の事業により別の会場で実施。①の課外放課後日本語教室は12月まで）科学館に通うことになった。当館は会場として場を提供するとともに、②の「放課後日本語補習教室」に通う外国につながりを持つ小・中学生を対象にした事業（イベント）を、夏と冬に実施する形で協力した。

【日本語教室との協働事業】

私たちは、日本語教室とともに事業を行うにあたって、日本語の学習に「科学の学び」をどのように生かせるかを、浜松国際交流協会の担当者と検討し、サイエンスショーとプラネタリウムの2つの事業でイベントを実施した。また、日本語教室では、科学館職員がいつでも自由に見学できるよう配慮していただき、夏と冬のイベントだけでなく、教室の時間内で工作体験を科学館職員と実施するなど、日常的な交流もできるよう協力していただいた。（図6）



図6：日本語教室での「くるくる紙ゼンマイカー」作り

(1) 夏のイベント (サイエンスショー)
「オノマトペでシャボン玉」



図7：サイエンスショーの様子

オノマトペ（擬音語・擬態語）は、音やものごとの様子を豊かに表現する日本語ではあるが、外国につながりをもつ人々にとっては伝わりづらく、習得が困難な言葉であるといわれている。（※6 静岡大学言語学研究会、2024）しかし、科学館では、科学的な現象や様子を伝える時、「ピカピカ光る」「磨くとすべすべになる」「水滴がほとほと落ちる」など、非常に多くのオノマトペを使って表現する。サイエンスショーの演目の1つである「シャボン玉」でも、日ごろから多様なオノマトペを使っていることから、ショー自体の楽しさと、オノマトペの響きのおもしろさが結びつくことで、日常生活でもオノマトペを使いたくなるようなショーを目指して、日本語教師と科学館職員が、一緒にショーを行った。サイエンスショーの醍醐味の1つは、エンターテインメントである。これまで、数多くのサイエンスショーを実施してきた職員が、通常実施しているシャボン玉のショーに、日本語教師を「招待する」形で再構成し、「やさしい日本語」についても触れながら、ショーを行った。（図7）

まず、日本語教師がクイズ形式で紹介するオノマトペの簡単なルールを、ショーの担当者と観覧している子どもたちが一緒に学んだ。その後、「くるくる」「ふわふわ」「ぴちゃぴちゃ」など、シャボン玉を作るときの動作やシャボン玉が浮かぶ様子などを表す多彩なオノマトペを口ずさみながらショーを進行し、日本語教室の生徒たちだけでなく、一般の来館者もともに楽しめる空間をつくり上げた。ショーを観覧した他の職員からも、「サイエンスコミュニケーションにおけるオノマトペの有効性について気づきがあった」との感想もあり、私たちもあらためて科学と言葉について考える機会となった。

流れ	予想されるオノマトペセリフ	その他
小さいストロー 小さい輪っか	・どンドン出す ・ふわふわしている	
大きな輪っか	・ふーと吹く ・ふーふー吹く ・プープー吹く ・ぐるぐる巻いて、作った ・ぐにゃぐにゃ曲げて作った ・液をちょんちょん漬ける ・くるくる回す ・くるっと回す ・ぐるーっと回す ・ぼちんと壊す	
もっと大きなシャボン玉をつくる	・どンドン入れる ・ふわーと出す	
シャボン玉をたくさん出す	「ん？そういえば、色々な表現があるね」 「オノマトペといいます」 「日本語に詳しい先生を紹介します、大平先生です」	

図8：※シャボン玉ショーの流れ

実施日：2024年9月16日（月・祝）
担当者：上野（チーフエデュケーター）
参加者：日本語教室の児童・生徒7人
家族・友人14人（計21人）

(2) 冬のイベント

「やさしい日本語でプラネタリウム」

「やさしい日本語」でのプラネタリウムは、日本語教室関係者から、強い要望をいただいていたイベントである。

当館では、毎日、星空解説をライブ（生解説）で行っているが、これまで「やさしい日本語」での解説を行ったことはほとんどなかった。今回、「やさしい日本語」で星空解説を行うにあたり、2つの目的を設定した。1つ目は、日本語教室に通う子どもたちに天文にかかわる日本語を学んでもらうとともに星空に興味をもってもらうこと。2つ目は、この投映を多文化共生や「やさしい日本語」に興味のある方、日頃プラネタリウム観覧に何らかの障害のある方に、観覧していただいたり、知っていただいたりする機会とすることである。そのため、投映担当者だけでなく、広報担当の職員も企画から入り、チラシ作りや広報の仕方について、ともに検討した。

①「やさしい日本語」への変換

「やさしい日本語」への変換は、浜松国際交流協会職員である日本語教室担当者にご協力いただいた。変換のプロセスは、まず投映担当者が星空解説の構成を考え、デモ投映した解説を文字起こしする。その際、解説をできるだけ「短い文」に変更したものを日本語教室担当者に渡し、「やさしい日本語」に変換していただいた。

変換後の解説文を見たとき、私たちは日頃、いかに「難しい」言葉を多用しているか、そして言葉が「多すぎる」か、あるいは「足りないか」を知ることができた。日本語教室担当者からは、外国人の方へ伝える際のポイントとして、以下のことをご助言いただいた。

- ・単文（主語1つ、述語1つ）にする
- ・語彙と文法は日本語能力試験 N4 レベル

※ N4：5段階中、下から2番目の認定レベル。語学スキルは「基本的な日本語を理解することができる程度」と定められている。

- ・抽象的で難しい漢語は避ける（例：固定・確認など）
- ・名詞修飾はできるだけ少なく、短くする
- ・動詞の動作主は「やさしい日本語」を聞いている人（外国人）にする

例：（私は）書いてもらいました

→（あなたが）書いてくれました

科学館では、科学に関するさまざまな情報や知識を、

利用者とのコミュニケーションを大切にしながら、実験や展示体験を通して「言葉」を使って伝えている。情報を正確かつ迅速に「伝える」「伝わる」ことに主眼を置いた「やさしい日本語」は、原理を説明するには難しさがあっても、対象に応じて大いに活用できるコミュニケーション手段である。しかし、時に「雰囲気」を大切に、抒情的にもなるプラネタリウムの解説を、修飾する言葉をできるだけ減らし、短く、はっきりと表現する「やさしい日本語」で行うことは、投映担当職員にとって、専門性との葛藤や難しさがあったのではと思う。内容や情報を削除するかどうかの検討では、担当職員の「どうしても伝えたい」という思いを強く感じたこともあったが、科学のおもしろさや楽しさを「伝えたい」という思いが先行しがちな科学館職員にとって、今回の取組は情報の取捨選択について考える、よい機会となった。

また今回、日本語教室担当者は、「やさしい日本語」への変換にあたり、「情報伝達のため」だけではなく、プラネタリウムの星空を見ながら「日本語を楽しむ」ことも目的の1つとしてくださり、もとの解説文の良さを生かすことを考慮しながら、投映担当者と丁寧に確認作業を行ってくださった。

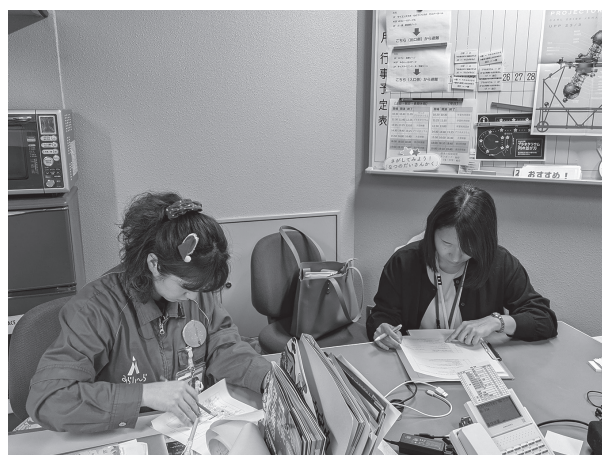


図9：「やさしい日本語」の解説文の確認作業の様子

国際交流協会の担当者と投映担当者との「やさしい日本語」に変換するまでのプロセスは、正解のない「やさしい日本語」というコミュニケーション手段を、科学館として、どのように事業や運営に生かしていくかを示唆していただいたように思う。変換された解説は、当館にとって、今後の事業のさまざまな場面における「やさしい日本語」のテキストとなるはずである。科学館職員だけでは実践することが難しかった作業にご協力いただいたことに、心から感謝するとともに、この

連携による成果を、今後、地域や市民に還元していくことで、地域博物館として多文化共生の社会づくりに貢献していきたい。

②情報を届けるために

今回の投映にあたり、対象として日本語教室の子どもたちだけでなく、多文化共生に関わる方や、日頃プラネタリウム観覧に障壁のある方も含めた。これは「やさしい日本語」が、外国人をはじめ子どもや高齢者、障害のある方などのコミュニケーションに非常に効果的なツールであるとされるからである。(※7法務省、2022)

では、設定した対象に対して、どのように情報を届けるのか。当館のホームページや市の広報誌で広くPRすることも考えたが、「それでは本当に届いてほしい人や場所まで、届かないのではないか」、「科学館からの発信は、科学や科学館に興味のある人には届くが、そうでない人にはなかなか目に触れることはないのではなか」などさまざまに「推測」をした。しかし、対象とする人たちが、どのようなツールを使って情報を得ているかを、リサーチできていなかったため、広報担当職員と検討し、外国人住民に向けて情報発信をしている浜松国際交流協会のFacebookから紹介していただくことと、今回のプラネタリウム投映の企画意図を載せたチラシを作成し、外国人学校や市内日本語教室、特別支援学校等に職員が直接届けることとした。今回は特別投映として対象を特定したため、届ける範囲は狭かったが、浜松国際交流協会のネットワークを利用したことで、日頃、浜松科学館の情報を得ることが少ないであろう市内在住の外国人の皆さんに情報を届けていただくことができた。また、NPO法人が開催している日本語教室や市内の特別支援学校、外国人生徒が増加している夜間中学校にも足を運び、先生や担当者と直接話をすることで、「やさしい日本語」を使った事業に対するニーズを知るとともに、科学館の取り組みを知ってもらえる機会となった。こうした対象に応じた広報は、届く範囲の狭さや非効率性から、館として日常的に取り組むのは難しいが、関係機関との相互広報も含め、ニーズを知るためのリサーチとして、実施していけたらと思う。



図 10 : 「やさしい日本語でプラネタリウム」チラシ

③日本語教室での事前学習

投映を担当した職員は、日本語教室で実施する事前学習にも参加した。日本語教室では、科学館との連携事業（イベント）の際、必ず、日本語（特に学習用語）について、事前学習を実施して下さった。今回の事前学習では、前半で日本語教師が天文に関する言葉の学習や、自分の星座を紹介し合う時間を設け、後半では投映担当者が、オリオン座の星並びを自由につなげて、自分だけの星座を作るワークショップ「オリオン座の形、何に見える？」を実施した。浜松国際交流協会と科学館が、それぞれの専門性を生かしながら一緒に授業を行うことで、日本語の学習と科学の学びを楽しむとともに、プラネタリウム観覧への興味につながられるようにした。



図 11 : 星座をつくるワークショップ

「オリオン座の形、何に見える？」は、館内無料ゾーンにも用紙を設置し、一般来館者にも自由に参加できるようにした。作品はプラネタリウムドーム入り口のホワイエに掲示をし、日本語教室の生徒の作品は、当日の投映前にドームにも映し出した。



図 12：プラネタリウムドーム内の様子

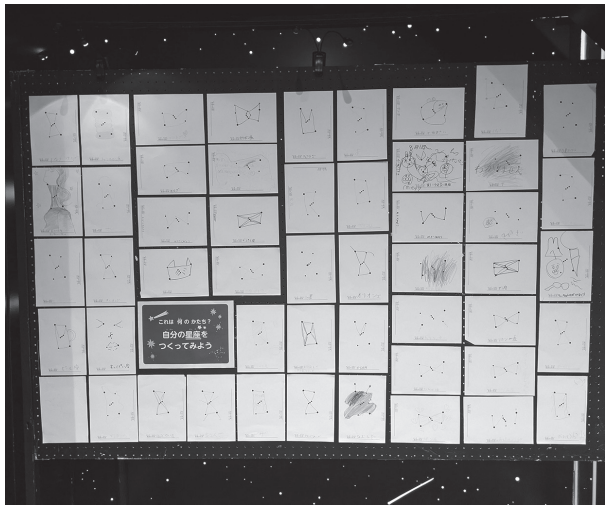


図 13：ホワイエに掲示した作品

④ 投映後の参加者の様子と感想

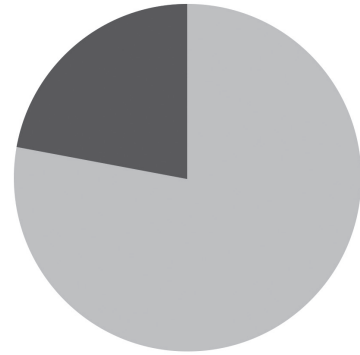
さまざまな母語を持つ人たちと一緒に見る星空は、その美しさに感嘆する声だけでなく、解説を母語で家族や友人に説明をする声などが混ざり合い、とても和やかな雰囲気だった。投映終了後は、外に出て職員と一緒に星を見上げる様子が見られ、投映後の余韻が感じられるひと時を過ごした。



図 14：投映後サイエンスパークにて星空観察

また、参加者には QR コードよりアンケート（「やさしい日本語」で作成）への回答を依頼した。（アンケート回答：18 人）以下、アンケート結果を一部抜粋して紹介する。

○浜松科学館に来たことはありますか？



● 来(き)たことがある ● 来(き)たことはない。はじめて

○今まで来たことがないのは、なぜですか？

浜松科学館を知らなかったから。

家が遠いから。

日本語が分からないから。

○感想

・プラネタリウムは、日本語が母語の自分でも情報が足りないとか易しすぎると感じることはなく、とても学びになりました。幼い子どもたちが職員さんのお話に反応して、おしゃべりしながら観ていたので、言葉がわかりやすかったんだなと思いました。（日本語母語話者）

・ガイドの方の事前の雰囲気づくり、話すスピード、声のトーン（声も素敵でした！）など、聞くための環境が素晴らしかったです。また、内容もとてもわかりやすかったです。（日本語母語話者）

アンケートでは、あまり多くの回答を得られなかったが、「やさしい日本語」での解説が分かりやすかったとの声を、外国籍の方だけでなく、日本語母語話者の方からも多くいただいた。また、「やさしい日本語」を使

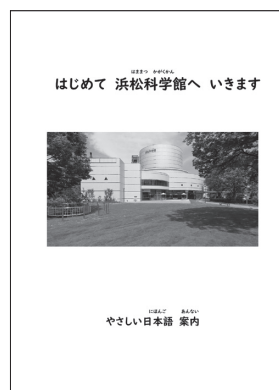
用した事業への要望も多くあった。さらに、浜松科学館を知らなかった、近くに住んでいるが来館したことはなかったという声もあり、情報が届いていないことを感じる回答が見受けられた。②（情報をとどけるために）でも述べたように、情報を、必要な人にどうしたら届けられるのかは、今後の課題である。



図 15：投映当日 受付の様子

実施日：2025年1月13日(月・祝)
 17:00～18:00 ※特別投映(無料)
 投映担当：島田(天文チーム)
 参加者：77人
 (内訳)
 ・日本語教室生徒・家族及び関係者 20人
 ・一般申込 57人(外国人市民、市内文化施設、福祉施設関係者、日本語ボランティア、科学館ボランティア、外国人学校生徒と教員など)

2022年、2023年に「やさしい日本語」研修を行った後、多文化共生の推進に何をしたらいいのかわからなかった私たちは、今回、浜松市の多文化共生事業を行う浜松国際交流協会と連携できたことで、科学館単独ではなし得なかった事業を展開することができた。私たち職員にとっては、「地域の特徴」である多文化共生について学びを得るとともに、地域博物館として、これまで対象としてこなかった外国人住民へのアプローチを試みることは、大きな一歩であると思う。また、日本語教室の事業とは別に、ボランティア研修で「やさしい日本語」を学んだ当館のジュニアボランティア(中学生・高校生)とともに、「やさしい日本語」案内の制作にチャレンジしたことや、市内外国人学校へ出張プログラムで出かけたことは、浜松国際交流協会との連携によって、背中を押していただき、実施できたと思っている。



浜松科学館
 バリアフリー情報

5. 協働により広がった可能性

博物館の定義(※8)はいくつかあり、代表的なもの、「博物館法」「ICOM(アイコム・国際博物館会議)」「UNESCO(ユネスコ・国際連合教育科学文化機関)」において、明記されている。しかし、博物館がその定義のもと、持続して存在するために重要なことは何だろうか。Museum Studies JAPAN「博物館の連携とは何か ― ネットワーク・協働・共助が支える持続可能な経営モデル」(※9)の中で、以下のように書かれている。

専門性・人材・空間・情報といったリソースを相互に補完し合い、共に成長していく関係性は、博物館という組織が単独で成り立つのではなく、つながりのなかで持続する存在であることを示している。



図 16：市内外国人学校での出張プログラム

市内には、博物館、図書館等の社会教育施設だけでなく、文化施設や大学もある。そして、それらはすべて地域の文化資源であり、市民、住民に活用されることで、支えられ、成長し、存続できる。地域の文化を担うそれらの施設と地域課題・特徴を共有し、その解決や発展のために資源(専門性など)を生かし合いながら地域に貢献していく道筋を、ともに考えていけたらと思う。

6. おわりに

個人的な話であるが、私はかつて中学校で国語科の教員として、教壇に立ったことがある。新規採用された年にクラス担任を経験させてもらったのだが、受け持ったクラスに外国につながる生徒が在籍していた。まだ、現在のように外国人生徒への支援体制が整っていない頃で、日本語をあまり話すことができない生徒とともに、どのような授業を行ったらよいのか分からないまま、過ごしていた。今考えれば、1990年の入管法改正で、外国人労働者やその家族の受入れ間口が広がった時期と重なる。あれから30年が経過した。「デカセギ」として来浜した外国人は浜松市に留まり、定住したことで、「日本」で生まれ育つ（育った）子どもたちや若者が多く存在している。

私は、今度は社会教育の場で、再び外国につながる子どもたちと関わりをもつ機会を得た。この30年間を振り返りながら、あらためて「共生」とはどういうことを考え、学び直す機会を持てたことは、幸運な巡りあわせだと感じている。昨今の社会状況をみると、排外主義の風潮が強まり、情報社会に慣れ親しんでいるであろう子どもたちの目に耳に、暴力的な言葉の数々が無防備にさらされていることを思うと、今ここで何ができるのかを考えずにはいられない。そのためには、まずは「知る」ことから始めるしかないのだろうと思う。

日本語教室の夏季イベントの企画中、私にとっては忘れられない出来事があった。オノマトペを使ったサイエンスショーの観覧者を、当初、日本語教室の生徒だけで考えていた。その時、「外国につながる子どもたちがサイエンスショーを見ている様子を、周りから一般来館者が眺める構図」について、指摘を受けた。当館のステージは、中二階にあり、オープンスペースのため、1階からも見上げられるし、2階からも見下ろすことができる。その指摘を受けたときに、自分の中のアンコンシャスバイアス（無意識の思い込みや偏見）に気づいたのである。なぜ、一般来館者と分けようとしたのか、そこに差別の意図などまるでなかったが、少なくとも日本語教室の子どもたちが、いつもと違う「特別な」サイエンスショーを見ている様子を、ほかの来館者が遠くから見下ろす構図に違和感をもたなかった自分に気づかされたのである。このように、自らのもつマジョリティとしての特権と加害性に気づかないまま、マイノリティをさまざまな言葉でラベリングし、無意識に排除していることが、自分自身や自分の身近

なところで起こっていることに、どれだけ気づけるだろうか。どんな立場であれ、「共生」を考える時、誰もが差別に加担していることを前提に、自らの意識を問い直すことが必要であると思う。

最後に、地域博物館が「共生」にどのような貢献ができるのかをまとめるにあたり、次の言葉を引用する。

「どうしたら共生できるか」と問うのではなく、すでに私たちが共生している場所を再発見する。気負わず、気長に、楽観的に、でも真面目に、それを守り、育み続ける。

（『共生の思考法』塩原良和著・明石書店・2025）

私は、拙文の中で多文化共生を「地域課題」という言葉とともに「地域の特徴」と意図的に表現した。浜松市に外国人が住み始めて30年。社会教育施設であり、公共施設である博物館施設において、「どうしたら共生の場をつくれるか」ではなく、すでに共生している地域にある博物館施設として、何をすべきかを考えていきたい。そのためには、市内のさまざまな施設、アクターとの連携、協働を通して、学び、知り、行動することが必要である。ここからさらに30年後、50年後に浜松科学館が市民にとってどういう存在として、あり続けたいのか。今、指定管理者として、一時的に浜松科学館を預かる私たちではあるが、浜松市における「共生」を考えることは、地域博物館の未来を考えることにもつながっている。

参考資料

- 1 調査季報 94 号・特集 博物館を考える
「現代博物館考」伊藤寿朗 1987.6
(参考図書)『市民のなかの博物館』伊藤寿朗著. 吉川
弘文館. 1993
- 2 「浜松の外国籍住民の受け入れの歴史」浜松多文化
共生・国際交流ポータルサイト
- 3 「浜松市世界都市化ビジョン」浜松市
[https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/
kokusai/visionindex.html](https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/kokusai/visionindex.html)
- 4 「浜松市多文化共生都市ビジョン」浜松市
[https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/
kokusai/kokusaitoppage.html](https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/kokusai/kokusaitoppage.html)
- 第1次 2013年度～2017年度
第2次 2018年度～2022年度
第3次 2023年度～2027年度
- 5 「国や浜松市の日本語教育方針について」浜松多文
化共生・国際交流ポータルサイト
- 6 「日本語学習者によるオノマトペ習得についての探
索的研究」谷口ジョイ, 桑原大輔 静岡大学言語学研
究会, 2024
- 7 報告書「やさしい日本語の普及による情報提供等の
促進の在り方」法務省, 2022
- 8 「①博物館ってなに？」文化庁博物館総合
サイト
<https://museum.bunka.go.jp/museum/>
- 9 「博物館の連携とは何か — ネットワーク・協働・共
助が支える持続可能な経営モデル」Museum Studies
JAPAN
[https://museumstudies.jp/2025/04/15/museum-
collaboration-sustainable-management/](https://museumstudies.jp/2025/04/15/museum-collaboration-sustainable-management/)